

退官者講演の概要

水曜会は、2005年3月16日および23日に当所講堂において、昨年度で退官した清水実嗣前所長、吉原忍総合防疫研究官、平詔亨九州支場長および福所秋雄生物学的製剤センター長による特別講演会を開催しましたので、予稿でその概要を紹介します。

「今日は昨日の明日、そして明日の昨日」

清水 実嗣



時の経つのは早いもので、家畜衛生試験場で仕事を始めて37年が過ぎた。37年という時間は随分と長い時間に違いないが、終わってみると瞬く間に過ぎ去ってしまったように感じる。この間、ワクチンの製造業務から始まり、2年間のアメリカ留学、合計2年半に渡る海外技術協力、北海道支場勤務、国際農林水産業研究センターへの出向、そして研究の企画管理業務など、多様な経験をさせていただいた。しかも、研究対象が鶏から豚、牛、緬山羊、馬ウイルス病と多岐に渡ったばかりでなく、日本で最初に発生したオーエスキー病や豚繁殖・呼吸障害症候群、口蹄疫や牛海綿状脳症、高病原性鳥インフルエンザ等の緊急問題、研究基本計画の改訂や第5巡目研究レビュー等に対する対応、独立行政法人への移行準備と新しい体制での研究所運営など、様々な問題に携わることができた。しかし、豚伝染性胃腸炎や豚コレラ、牛ウイルス性下痢・粘膜病など、多少は心に残る仕事もあったものの、これといったライフワークもなく、また表題の意に反して日々の積み重ねや反省もなく、ただ漫然と時流に流されてしまったことが多かったのではないかと思っている。もう少し研究室の仕事をしておけばよかったと、今となってはせんのない反省もしている。今日は来し方を振り返りつつ、感じたことをいくつかお話ししたいと思う。

「33年間の公務員生活を顧みて」

吉原 忍



昭和47年に寄生虫学で選考採用され、33年近くが過ぎようとしている。採用された頃は、肝蛭や豚回虫などの寄生率も高く、ある程度は注目されている分野であった。学生の頃から寄生虫の抗原、血清反応、病理に興味があり、当時の部長の指示もあったが、結果として、最後までこれらの仕事にお付き合いすることができた。今でも感謝している。私の公務員履歴の特徴は、北陸(柏崎)、鶏病(関)、九州(鹿児島)の3支場(今の支所)と2つの他場所勤務が連続して通算16年半にも及んだことである。多分、この記録は破られることはなからう。本所に長期間居たのでは経験できない事も経験した。例えば、支場では家畜保健衛生所の先生や農家との交流、畜試では去勢、ワクチン接種を含む豚の飼養管理全般、国際農研では2年間のベトナム、メコンデルタでの共同研究である。とりわけ、メコンデルタで、豚回虫感染による経済損失を数値で示せたことや日本にいない豚の吸虫の感染ルートをある程度解明できたことなどが記憶に残っている。どこにいても、成果を「まとめる事」を旨としていたので、内容は別として、レポート(領収書)はある程度は書いたつもりである。また、今、野外との結び付き、連携が取りざたされているが、振り返ってみると、意識していたわけではないが、仕事の主な部分(豚回虫症、肝蛭症)は野外からの直接的、間接的な要請で行っていたような気がする。私の最大の希望は、一度後輩の寄生虫の研究を手伝わせてもらう事であった。最後に夢が叶い、心置きなく動衛研を去ることができる。

「この半世紀における寄生虫病と諸環境の変貌」

平 詔亨



この半世紀は正に激動の渦にある。日本人の食糧は長年、米穀と海産物であり、肉と言えば鯨肉であった。今から60年前の敗戦1945年(S20)後は、飢餓・食糧難「低栄養失調」の時代であった。自給自足を強いられた我々は、下肥による米穀・野菜作り、雑草・残飯等による鶏・兎・山羊を飼育した。水田には農耕馬牛が散見された。人生50年と言われ、不治の病・結核、そして寄生虫(病)の全盛時代であった。畜産業の起点は、農業基本法1961年(S36)の制定にある。以降、ひたすら増産・拡大へと進んだ。デンマーク式豚舎、プロイラー、乳用牡犢、牧野造成・放牧衛生等がキーワードとなろう。1980年代に入ると、家畜の密飼は極限に達してきた。長年親しまれてきた敷料・敷き藁は、オガクズ敷料に置換されはじめ、現在、畜舎の敷料は、使わない(スノコまたはメッシュ)が、オガクズ敷料となっている。そして無窓畜舎と大規模企業畜産の登場である。このような飼育環境の変化にともなって寄生虫病の種類も大きく変わってきた。現在、家畜は生産性・収益性向上に偏し運動不足を含めて一部「偏栄養失調」に、人は飽食とダイエットの矛盾「高栄養失調」におかれているが、今、その反省からレトロ基調が目立ってきた。一方、電化製品・情報機器の登場・進歩も畜産業のそれと類似した変貌が見られる。自身の生い立ちから家畜臨床寄生虫学の路と仕事を折り重ね、この半世紀の軌跡を辿る。

「実験四方山話」

福所 秋雄



動衛研では家畜防疫に係る診断・予防技術の開発を目的とした研究が長年進められてきたが、科学技術の進展に伴って研究内容も高度・複雑となり、出口(実用化)に到達するまでの過程に以前と比べて時間と経費を要するようになってきている。過去に実用化されたワクチンや診断液等の製剤の多くは第1世代の製剤で、現在は、より安全性(人に対する安全性も含め)、有効性が高く、省力化のできる次世代製剤の開発が要求されている。しかし、これらの新たな発想に基づく次世代製剤の開発には病原体の遺伝子・蛋白質解析はもとより、生体における感染・発病機構や免疫反応等の生体防御機構の解明を基盤とした基礎知見の集積が必要となっている。

私自身のことを振り返ってみると、昭和47年に動物医薬品検査所に採用され、畜産局衛生課薬事室を経て昭和54年から家畜衛生試験場(現動衛研)に配置換えとなった。動衛研では、製剤研究部、研究第2部、海外病研究部に勤務し、再度の動物医薬品検査所検査第1部を経て、動衛研に戻り、九州支所、海外病研究部、そして、生物学的製剤センターでの勤務が最後となった。この33年間の多くは生物学的製剤に関わる仕事に携わったので、当時の第1世代製剤の開発等を通じて私の経験したいくつかの実験(豚コレラ、豚口タウウイルス、ブルータンク、アフリカ馬疫等)についてエピソードを交えながら話をしたい。最後に、私の研究(実験)経験から伝えたい言葉は「遊び心」と「夢」の二つである。もちろん、「オブリゲーション」を果たした上での話である。参考になれば幸いである。